

「私立大学われを創りき」

藤田保健衛生大学の学生たちによる 自主活動・ボランティア活動

堤 寛 (ツツミ ユタカ)

(藤田保健衛生大学医学部第一病理学、教授)

2011年3月11日(金)午後、東北地方で未曾有の大震災が発生した。直後の3月13日(日)、南山大学を中心とする名古屋地区の学生たちが名古屋市の中心地・栄に集合し、被災者支援のための募金活動を行った。285万円が集まった。そこに参加して、「自分たちだけでもできる!」と感じた本学医学部の学生たちのべ50人が、3月19日(土)~21日(月、祝)の3日間、イオン大高店に集結して、募金活動を展開した。そして、計300万円以上の募金を集め、日赤へ寄附したという。この迅速かつ自主的な行動力とめざましいパワーに、筆者は人間として感激し、学生たちにこころからのエールを送らせてもらった。

現在、藤田保健衛生大学では、学生たちによる自主活動・ボランティア活動が著しく活性化され、さまざま展開されている。筆者は、医学部ボランティア同好会・管弦学部の部長教員として、ボランティア活動の実践者として、そして学生たちの活動を見守り・叱咤激励・支援してきたものの一人として、学生たちに芽生え育った本物の自主性を、一人でも多くの学生、教職員・同窓会諸氏、さらにご家族、患者さんや地域社会にも広く知っていただきたいと願っている。

こうした活動の活性化は、医療系大学としても、個々の医療人としても、大いに奨励されるべきである。学生たち自身、教職員諸氏、同窓会、家族や地域社会の方々が深く理解して、奨励・刺激・応援すれば、その輪はますます広がってゆくであろうと予測される。この点がまさに、本報告書の目的である。

1. ボランティア活動の芽

まず、藤田保健衛生大学におけるボランティア活動の歴史を、筆者が認識している範囲内で、簡単に紹介させていただきたい。

飯谷友佳子さんは現在、名古屋記念病院の研修医2年目である。医学部1年生だった彼女は、“アセンブリ”科目の「ボランティア班」を選択した。このボランティア班は、倫理学の佐藤芳先生、医療科学部の市原慶和先生と筆者がコアとなって、この年新規に追加し、今も継続されている全学的な選択科目であり、学生たちにボランティア活動のきっかけをつくることが目的である。彼女は、実習で訪れた知的障害者授産施設で、何をしたいかわからない自分がいたという。2004年9月26日(日)、飯谷さん、乳がん患者会「わかば会」リーダーの寺田佐代子氏と筆者は、愛知県日進市にあるアジア保健研究所(AHI)を訪ね、フィリピンとインドネシアからの研修生(保健師)の一日市内案内ボランティアに参加した。デコボコ英会話の一日だったが、この経験が飯谷さんの活動に火をつけたに違いない。

翌年、学内にボランティア同好会を立ち上げた彼女は、その後、乳がんや筋萎縮性側索硬化症(ALS)の患者会に積極的に参加した結果、2007年9月、愛知県芸術劇場大ホールで開催された第16回全国ボランティアフェスティバルあいち・なごやに、学生代表パネリストとし

て参加するまでに成長していた。彼女の蒔いた芽は、現在、大きな根を張る若木へと成長している。

「世界の宝となる学生の会（現、MeTs-Japan）」は、我妻将喜くん（当時医学部3年、現6年）が、国際医療、僻地・離島医療や医療に関わるさまざまな問題に関心をもつ学生が集い、多くの経験を共有することで自己成長を図ることを目的として、2008年4月に設立した会だ（筆者は相談役だった）。ミャンマーを中心に国際医療活動を展開する吉岡秀人医師が運営する「Japan Heart」に協力しつつ、国際医療活動・全国の医学生同士の連携を活発に展開している。愛知県内で医学部をもつ4大学の学生たちがつくるイベント、Medical Students in Aichi (MeSIA: メジア)とも連帯している。こうして、藤田保健衛生大学発の自主活動の波は、現在、全国の医療系大学へと確実に広がっている。

〈3〉 第681号 (第三種郵便物認可) 9/11/07 ふれんどあさひ

スームアップ

ボランティアフェスティバルのテーマトークに
学生代表パネリストとして参加する
いいに ゆかこ
飯谷 友佳子さん (22)



患者とのふれあい体験話したい

「夢を知り、夢を育む」
ボランティアのテーマとして、何となく思っていた。自分自身でできた経験、そのままだと話したいと願っていた。藤田保健衛生大学医学部4年生、入学した年の教養課程に「ボランティア」科目が導入され、選択でボランティアを選んだ。表割で訪れた豊明の知

また、この道を専門にしようが定まっているが、豊明市の実業で腰痛を悩む父のように地域の人と深くかかわることのできる仕事がしたいと思う。「でも母が病状が年々進んでいって、女性としての生き方も探っているようにだ」(敬)

ふれんどあさひ（2007年9月11日号）に掲載された飯谷友佳子さん（当時、医学部4年）の記事

中日新聞 2008年(平成20年)6月25日(水曜日)

サイクロン被害を受けたミャンマーの復興支援などに役立ててもらおうと、豊明市の藤田保健衛生大医学部の学生有志と岡大の乳がん患者会「わかば会」が28日、岡大でチャリティー映画会を開く。会場で集めた支援金は、NPO法人・地球市民A.C.T.かながわ（横浜）に寄託する。（榊原智康）

映画会で善意募る



支援をミャンマー交流を

上映するのは、タイの山岳地帯の学校を舞台に、子どもたちの成長を記録したドキュメンタリー「アック子」だ。支援金はミャンマーの復興支援のほか、タイの山岳地帯の子どもたちの教育支援にも活用する。

28日に保健衛生大で

映画会を開催する我妻将喜さん（右から2人目）ら医学部生有志。豊明市の藤田保健衛生大医学部4年生の我妻将喜さん（豊明市）は、多大な犠牲者が出たミャンマーのサイクロン被害を受け

「乳がん患者会」が企画した。作品は試写を見た、わかば会代表の寺田佐代子さん（豊明市）は「生きていることを再認識させてくれる内容。悩める若者が患者会にとって一生懸命に生きている姿、きっかけになるかもしれない」とPRしている。

会場は岡大医学部一号館五号ホールで、午後2時から。我妻さんへ電話090-3429-471

世界の宝となる学生の会の紹介記事（中日新聞、2008年6月25日掲載）

2. 藤田保健衛生大学学生による自主・ボランティア活動の実例

以下、筆者が把握している範囲ながら、医学部ボランティア同好会、大震災支援を目的とした募金、管弦楽部、東洋医学整体研究部、医学教育を考える学生の会、Fujita ACLS Workshop Instructors、MeTs-Japan (Medical Treasures in Japan)、および小川崇くん（写真部）の活動を紹介したい。学生リーダーから送ってもらった文章に多少の修正を加えさせていただいた。

このほかにも、“アセンブリ”授業としてのボランティア班活動（院内や地域でのさまざまな活動が授業の必須課題となっている）、医療科学部における学生ボランティア同好会の活動、看護専門学校の学生たちによる学園祭における献血車活動などがある。ここでは、医学部学生の活動を主体に記述する。

①医学部学生ボランティア同好会

責任者：医学部3年 毛受大也

活動参加者：M1（6名）、M2（8名）、M3（6名）、M4（1名）、M5（2名）、M6（1名）

（藤田保健衛生大学医療科学部学生ボランティア同好会と協力しつつ活動している）

活動目的：ボランティア活動を通して社会に貢献し、座学では学べない見聞を広めることを目的とする。また、新しいボランティア活動の提案や情報の発信を行い、学生のボランティア活動への参加を促している。

活動内容：

①緩和ケア病棟ボランティア…第一教育病院の緩和ケア病棟において、看護師のお手伝いと患者さんの話を聞く傾聴ボランティアを6回行った（2010年度）。強い痛み止めを使っている方や、がんなどによる痛みが強い患者さんでは、話をすることや患部を擦ってあげることによって痛みを和らげることができる。そのため、自分たちでも患者さんの役に立てるこのボランティアを企画した。参加前に、緩和ケア専門医によるホスピス緩和ケアの概論のセミナーを受講した。さらに、第1回遺族会にスタッフとして参加することで、遺族の方がどんな思いを抱えているかを知ることができた。

②エイズ予防活動…6月に名古屋で開催されたNLGR（Nagoya Lesbian & Gay Revolution）に参加し、エイズ検診の会場誘導およびエイズ啓発活動としてのコンドーム配布を行った。

③七栗サナトリウム花火大会の手伝い…第三教育病院で催された花火大会のボランティアスタッフとして、花火の用意や患者さんの誘導のほか、病棟でのボランティア活動を行った。

④岡山ハンセン病療養所訪問…夏休みに、ハンセン病患者の療養施設（国立療養所邑久光明園、愛生園：岡山県瀬戸内市長島）の見学・研修を行った。

⑤MeSIA、MeTs-Japanとの連携：愛知県内で医学部をもつ4大学の学生たちが中心となって開催するイベント、Medical Students in Aichi（MeSIA：メジア：リーダーは名古屋大学医学部3年の脇田祐実さん）やMeTs-Japanと連携して、情報交換を行っている。

2011年度も、同様の活動の継続を予定している。



2011年6月、3号棟7階緩和ケア病棟にて
（左：M1 安藤由梨恵さん、右：M3 毛受大也くん）



2011 年春、名古屋大学に集合した MeSIA のメンバー
(HP より引用許可)

②医学部・医療科学部ボランティア同好会による東日本大震災支援のための募金活動

責任者：医学部 5 年 神野重光、池田知世、同 4 年 岩田隆一

活動参加者：内訳（*）： M1（3 人）、M2（5 人）、M3（6 人）、M4（28 人）、M5（2 人）、M6（5 人）、医療科学部（4 人：ボランティア同好会） *H22 年度の学年

活動目的：東日本大震災による甚大な被害を知り、将来の医療従事者として、義捐金の募金活動を実践した。ボランティア同好会顧問の倫理学、佐藤芳教授らの助言を得た。被災者のために何かしたいが具体的な方法をみいだせないと感じている学生の気持ちをくみあげ、現地の支援につながる架け橋となることを目的とした。

活動内容：

期間：平成 23 年 3 月 19 日（土）～21 日（月、祝）、11 時～17 時

場所：イオン大高店（募金に際して、「協力」という形で、藤田保健衛生大学ボランティア同好会名が掲示された）

活動人数：各日 20 人前後、総勢約 50 人

募金額：19 日（土）：110 万円、20 日（日）：113 万円、21 日（月）：詳細な金額は不明だが、前日と同程度と推定。

募金送付先：

本募金活動は、イオングループによる東日本大震災支援募金活動に協力する形で行われ、募金はすべて、イオングループから日本赤十字社への義援金として送られた。

感想（医学部 4 年、池田知世）：

東日本大震災によって苦しんでいる被災者のために何かできないか、というもどかしい気持ちを行動にうつせて大変よかった。私にとって初めてのボランティア活動であり、どのように行っていいかわからない中、佐藤芳先生に多くのアドバイスをいただいた。小野雄一郎医学部長（現理事長）や事務の方々も快諾してくださり、また、解剖学教室の野村隆士先生や公衆衛生学教室の飯田忠行先生・太田充彦先生にもアドバイスのほか、募金箱をいただいた。

医学科全学年約 600 人にメーリングリストを流したところ、参加したいという反応が本当

に早く、また、参加できない人からも応援のメッセージが届き、藤田保健衛生大学の学生のあたたかい心意気を痛感した。活動中、みんな声がかかるほど呼びかけを行っていて、被災者のために何かしたい、という気持ちがひしひしと伝わってきた。

募金してくださる方々は、「お願いします」と言っていてくれる小さな子、「頑張ってね」・「ご苦労さま」と声をかけてくださる方もたくさんいて、とても心あたたまった。

募金額は、当初の予想を大きく上回り、協力者全員驚いたし、大きな満足感が得られた。終了後にたくさんの協力者から「何かしたいけれど何をしたらいいかわからず、もどかしい気持ちでいっぱいなときに、この活動を知った。参加できて、本当によかった」という声をいただいた。



イオン大高店で募金活動する医学生たち
(2011 年 3 月 19 日)

③管弦楽部・同好会

責任者：医療科学部 3 年 坂口紗也子

参加者：部員 33 名（医学部・医療科学部合同）

活動目的：ボランティア演奏やその運営を行い、患者やその家族に音楽を楽しんでいただくことを目的とする。医療系の大学の部活として、演奏だけでなく、患者・家族や医療関係者との交流も重視する。当然ながら、部全体や個人の技術的な向上を目指す。

活動内容：

大学病院や大学外でのボランティア演奏は、昨年度 8 回、今年度も 8 回予定。また、大学病院の「いこいの広場コンサート」で、年 10 回程度のボランティアスタッフをして活動。今後、他の病院や施設、寝たきり患者の自宅への訪問演奏なども意欲的に行う予定。

- ・ 藤田学園市民公開講座（2000 人ホール）で前座演奏（5 月、10 月）
- ・ 大学病院緩和ケア病棟でミニコンサート（8 月、12 月）
- ・ 大学病院の「いこいの広場コンサート」（1 月）
- ・ クリスマスコンサート（12 月、大同病院：名古屋市南区）
- ・ がん患者支援コンサート“愛あふれるがん患者支援を”（11 月、愛知県がんセンター）
- ・ 筋萎縮性側索硬化症（ALS）患者さん宅への慰問演奏（3 月、4 月）



ALS 患者である藤本栄氏の横で演奏する部員たち
(2011 年 4 月、名古屋市緑区)



藤本栄氏宅で演奏する部員たち、その 2

④東洋医学整体研究部

責任者：医学部 3 年 渥美里紗

メーリングリスト参加者（計 104 名）：M1（23 名）、M2（26 名）、M3（17 名）、M4（14 名）、M5（15 名）、M6（9 名）

活動参加者：東洋医学整体研究部部員

活動目的：大学の授業ではコマ数の少ない東洋医学に関して、学生が主体となって知識を深める。将来医師として働くにあたって、患者さんに合う漢方薬の選定ができる。多くの考え方に触れることによって、一つに捉われない柔軟な思考ができる。東洋医学の考え方の一つである全人的な見方を習得する。

活動内容：

部活動としては、毎週数回、上級生が下級生に、講義の形で自身の知識を伝える。学外の講師を呼んで講義を受ける場合もある。自主的活動として、学外・学内の漢方・東洋医学の勉強会へ積極的に参加している。

活動実績（昨年度）：

- ①第 61 回東洋医学会学術総会（ワークショップへの招待） 参加者 5 人
 - ②「基礎からの漢方 60 分」（名古屋市立大学病院で隔月に行われる小太郎製薬主催の漢方勉強会） 参加者 4～5 人
 - ③医学生のための漢方講座（小太郎製薬主催の 5 泊 6 日の勉強合宿） 参加者 2 人
 - ④株式会社ツムラ主催の漢方勉強会（毎年 10 月に本学開催） 参加者 8 人
- 今年度は、さらに多くの勉強会へ参加し、他大学との交流の機会をつくる予定。



名古屋市立大学薬学部薬草園を訪問し、
“麻黄”という生薬について学ぶ。

⑤医学教育を考える学生の会

責任者：医学部 3 年 花井翔悟

メーリングリスト参加者（計 72 名）：M1（10 名）、M2（13 名）、M3（21 名）、M4（14 名）、M5（6 名）、名古屋大医学部（3 名）、愛知医大（3 名）、その他（2 名）

活動参加者：部員登録者

活動目的：本年度から医学部の正式な同好会となった。東海地方を中心に、医学教育に関連する各地の勉強会情報を発信してゆく。

活動内容：

①病院見学：自分の興味のある科を見学する。昨年度は麻酔科、ICU、心臓血管外科を見学。今年度は、統合外科の手術見学や各種カンファランスへの参加を予定。

②講演会：東日本大震災支援医師による報告会（救急医学：加納秀記先生、病理学：稲田健一先生、参加者は 1～4 年で 30 名弱）、「リハビリテーションとは？」（七栗サナトリウム院長：園田茂先生、参加者は 1～4 年で 10 名強）。

③自主ゼミ：以下の 4 つの理念のもと、月 1 回、症例検討、勉強会や自主的に調べた内容の発表をする場としてのゼミを開催する。i) ひとつの講演で得た知識・方法論が、多くの分野に発展可能である。ii) 参加型で、参加者が“考える”ゼミとする。iii) 演者も勉強になる。教えることによって知識が深まる。iv) 大学の授業では教えてくれないが、必要性が非常に大きい。

参加者は、間違えることを恐れない積極的な姿勢で発言し、演者は自身の議題がどうしたら他人に伝わるかを学ぶ。

④学内および学外勉強会：

a) 基礎統合実習（参加者 4 名）：毎年 8 月に岐阜大学で行われる 3 泊 4 日の実験合宿（日本医学教育学会主催）。東京から高知まで全国の大学から学生が集まり、一つのテーマについて、自分たちで実験系を考えて、動物実験した結果を、日本医学教育学会で発表する（医学教育企画室：松井俊和先生・中島明先生・石原慎先生、病理学：堤寛が協力）。

b) 亀井道場（参加者 6 名）：名古屋市栄にある亀井内科・呼吸器科主催の勉強会。毎月全国から 1～2 名の講師が講演する。

c) 心月輪 Part 2（参加者 7 名）、毎週火曜日夕方、本学救急内科、山中克郎教授による症例検討会。学生や研修医が参加。

d) その他の勉強会：

12 月…Student CASP Workshop in Kobe（参加者 2 名）、神戸薬科大にて EBM の勉強会。

若手医師セミナー（参加者 3 名）、ファイザー製薬主催の研修医向け勉強会。

2 月…ジェネラルマインド医師養成セミナー（参加者 2 名）、愛知県医師会主催。

第 67 回東海びまん性肺疾患カンファレンス（参加者 2 名）。

神戸大学病理部見学（参加者 1 名）、客員教授、伊藤智雄教授による病理診断見学。

3 月…リハビリテーション体験ツアー（参加者 2 名）、本学リハビリ科主催の 2 泊 3 日体験。

5 月…第 30 回若手医師のための感染症セミナー（参加者 5 名）、中部労災病院での勉強会。

毎週…モーニングレクチャー（参加者 7 名）、本学での毎週水曜日（朝 8 時）の勉強会。



東日本大震災被災地支援体験談「検死」

（病理学、稲田健一准教授、2011 年 4 月）



「リハビリテーションとは？」園田茂先生とともに（2011年5月）

⑥Fujita ACLS Workshop Instructors

責任者：医学部5年 谷口由佳

活動参加者（計42名）：M2（2名）、M3（3名）、M4（13名）、M5（11名）、M6（10名）、看護学科（3名）

活動目的：将来医療を担う人材として基本的知識となる一次救命処置BLS（Basic Life Support）を、医療系学生を中心とした数多くの学生に知ってもらうとともに、自らの知識・技術を研鑽することを目的とする。BLSからさらに踏み込んで、ACLS（Advanced Cardiac Life Support）、PALS（Pediatric Advanced Life Support）などを学び、救急医療に関心の高い学生が大学間の垣根を越えて交流し、知識を深め、将来医療を担う学生として、知識の習得、さらに、ワークショップ運営を通じて組織のマネジメントなどを学ぶことも目的の一環とする。以上の活動を通じて、現在年間約3万人程度発生すると報告されている心停止による死者を減らしてゆきたい。

活動内容：

2005～2010年の毎年度、インストラクター、参加者を合わせて、100名以上を募るワークショップを開催している。

2010年10月：2nd Fujita ACLS Workshop

概要：成人BLS、乳幼児BLS、FBAO（異物除去法）、Monitor（心電図の学習）、Airway（気管挿管）、Drug（薬剤）、ALS初期対応（チーム医療を学ぶ）、VF/pulseless VT（除細動適応となる心室細動、心室頻拍の救命処置を習得する）、PEA/Asystole（除細動不適応の心室波形の救命処置について学ぶ）といったステーションを含むワークショップを、本学生涯教育研修センター14階で行った。参加者は、インストラクター、新規参加者を合わせて、総勢100名に及んだ。計2日間にわたり、知識・手技の習得、交流を行った。

AHA 2010ガイドラインが導入されたために、今年は大きな転換期となっている。各大学で開催されるACLSワークショップのコンセンサスも大幅に変更となった。2011年5月、2010

ガイドラインによるワークショップが愛知医大で開催され、本学からインストラクター20名が参加（参加者総数は50名ほど）。

今後も、9月に岡山大、大分大、10月に徳島大、愛知医大、11月に奈良医大での開催が予定されており、本学からもインストラクターが参加予定。

2012年3月には、本学での2日間にわたる3rd Fujita ACLS Workshopを開催予定。

感想（医学部4年、岩田隆一）：

不幸な突然の心停止による死者を一人でも減らすことができるように、誰でもできるBLSをより多くの人に知ってほしい。また、助けることが非常に困難な状況にあるとき、医療者は患者さんに対して何ができるのかを考えてほしい。さまざまな思いのもと、この活動は全国的に展開され、今日まで継続されている。

最近では、各大学において ACLS ワークショップに参加した学生が中心となったサークル活動が展開されており、医療系学生のみを対象にするのではなく、一般の方にも BLS の手技を広める活動が行われつつある。藤田保健衛生大学のインストラクターも、現在の活動からさらなる社会貢献を考えながら、「藤田発！」の活動を今後も継続してゆきたい。



第2回藤田 ACLS ワークショップに集合した
インストラクターたち（2010年10月）



第2回藤田 ACLS ワークショップ実習風景

⑦MeTs-Japan (Medical Treasures in Japan)

責任者：医学部6年 我妻將喜

活動参加者：M4、M5各1名（2010年度）、他大学からの参加者学生として、滋賀医大、京都大学、聖路加国際看護大学、名古屋大学、北海道大学、東北大学、高知大学、山口大学、日本医科大学、愛知医科大学、産業大学、筑波大学、広島大学、東京理科大学、大阪市立大学、千葉大学、石川県立看護大学、城西大学、北里大学、岐阜大学、昭和大学、鳥取大学、久留米大学、米国プリンストン大学、琉球大学、東京慈恵会大学、和歌山大学、富山大学、東京都立府中看護学校、獨協医科大学、神戸大学、など約80名。MeTs-Japanの活動は今や全国へ広がっている。

活動目的：国際医療・地域医療の現場体験を学生に提供し、国際医療・地域医療に貢献する。国際医療・地域医療に関心のある学生の交流の場を提供する。

活動内容：

2008年：発足（世界の宝となる学生の会）、国際医療の自主的勉強会および各種分野の先生を招いた座談会、講演会を開催。

2009年～現在：NPO法人ジャパンハートの協力のもと、学生に国際医療（ミャンマー・カンボジア）や地域医療（長崎、島根、山梨などの病院）の体験の場を提供する。

2010年～現在：ミャンマー・カンボジアの孤児施設や視覚障害者トレーニングセンターの現場体験の場を提供：ミャンマー国際医療体験ツアー（2、3、7、8、9月）、カンボジア国際医療体験ツアー（2、8月）。年4回の学生交流会、数回の座談会。

2011年3月～：東日本大震災後、仙台に事務局を置くジャパンハートに協力し、東日本大震災被災地への学生派遣を支援。各大学の学生による東日本大震災街頭募金活動を展開（J. S. Foundation協力、代表：佐藤佐江子氏）。



ミャンマー中部に位置するワッチェ慈善病院（ジャパンハートの活動拠点）に入院する患者さんと家族（左から2人目が我妻將喜くん）



ワッチェ慈善病院付属孤児院、ドリームトレインの子どもたち

⑧小川崇（写真部）

責任者：医学部 5 年 小川崇（個人レベルの活動記録）

活動目的：医学生として患者さんと関わり、患者会へ学生ができる支援を行う。

活動内容：

- ①2009 年より：NPO 法人ぴあサポートわかば会のホームページを作成・管理

<http://www.npowakabakai.com/>

（わかば会が NPO となるに際して、ホームページを開設。その作成と管理を継続）

- ②2011 年 4 月 20 日：写真集「あなたとともに WITNESS～ がんサバイバーの詩に現役医学生の写真が向き合う～」発刊（¥600+税）

詩：寺田佐代子（わかば会理事長）

写真・編集：小川崇（M5）

発売：株式会社三恵社 ISBN：978-4883618576



第一部「こころの動き 衝撃から新しい希望へ」は、キューブラー・ロスによる12の悲嘆のプロセスをテーマとした詩に写真を添えた構成になっている。第二部『こころのおくりもの』は、今こそ伝えたいありがたい気持ちを詩にして、写真を添えた。

感想（小川崇）：

学生ができることは数多くあるが、私の場合、患者会であるNPO法人ぴあサポートわかば会とご縁があった。それをきっかけに、自分ができることをみつけ、現在まで関わってきている。学生が自主的に行っている活動に、ぜひご理解いただけると幸いです。

結語

「おっ！学生たちもなかなかやるじゃない！」が読んでいただけた方の正直な感想ではないかと思う。そう、学生たちは捨てたものじゃない。みえないところで、けっこうがんばっている（シャイなのか、あまり問題意識や実力をみせてくれない）。この素晴らしい自主性・ボランティア精神を大切に育てていくことが、学生たちを支える教職員や先輩諸氏、父兄や地域社会の人々の役割だと筆者は信じる。

チャンスがあれば、もっともっとやるかも知れない可能性を秘めた集団。それがこれからの藤田保健衛生大学を支える若き人材なのである。この記事を読んでもくれた人は、ぜひ学生たちの応援団となってほしい。

近い将来、早稲田大学、佛教大学、立教大学、立命館大学、南山大学、国際医療福祉大学など多くの大学に設置され、大きな成果をあげている「ボランティアセンター」が開設されて、学生たちの自主活動・ボランティア活動を支援する仕組みが学内に定着することが切望される。

2011JUN17